

おバカ少女is愛をサガ
す

隣のむかい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何かと問題を起こすトラブルメーカーであるネイチャは魔法に夢見る少女。例え魔
法を一回使うだけで死にかけてしまう特異体質だとしてもその想いは変わらない。

居候先でのドタバタ生活から始まり、同性愛者、ストーカー、ヤンデレ、狂信者。そ
の他イロモノ集団に囮われ次から次へといらん事に巻き込まれる中、自身に関する秘密
が明らかになっていく。それはやがて世界を巻き込む程のものとなつていき……。

少女が知るは希望か絶望か、それともーーなんて深い事まで考えない少女はその場そ
の場を搔き乱し好きなように生きていくのであつた。

ネイチャのイラストになります。イメージを崩したくないという方は閲覧注意です。
小説家になろう様にも投稿しますのでよろしくお願ひします。

目

次

第一話	少女の日常	
第二話	夢に咲く花	
第三話	未来への一步	
第四話	嘘と誠	
第五話	来たる白きモノ	
第六話	色なき世界	
第七話		
大蛇		

78 64 47 33 22 10 1

第一話 少女の日常

“好奇心は猫を殺す”とはよく言つたものである。

ふとした事柄を調べていくと予想だにしなかつた結果が待ち受けているなんてことは常であり、中には口クな結末にならないと分かつていながら突き進む者もいるほど好奇心というのは逆らい難いもの。

例えば、この少女の様に。

「あわわっ、ご、ごめんなさいいい!!」

「ここにある本は読むなど。なんだ言つたらその空っぽな頭に私の言葉が届くのかしら」

ネイチャは通算三桁目に突入してしまった叱咤に、内心ある種の達成感と自責の念を抱いていた。当然、心境の大半を占めているのは後悔であるという事は言うまでもない。そしてそれを改善する気も無いのはこれまで叱られてきた数が物語っている。「少し目を離しただけで言いつけを破り、あまつさえ盗みを働くとする。そんな悪い子にはどう落とし前をつけさせようかしらね。ねえ、貴女の意見を聞かせてくれる?」

眉間にシワを寄せ突き刺す様な鋭い視線と共に、聞く者に底冷えさせる声音でそう言
い放つのは艶のある黒髪をした女性。

名をデイー・ネ。そんな彼女の真紅の眼光に晒されているのは、体を硬直させガタガタ
小動物のように震える、村娘風の格好をした十歳前後の幼い少女、ネイチャであるが、
デイー・ネの自室に無断で入り込み書物の持ち出しを企て実行したのだ。

証拠としてネイチャの手は麻袋の中に突っ込まれており、そこから分厚い本がガツツ
リのぞいている。大方、部屋の半分以上を占める本の壁からならバレないと踏んでいた
のだろうか、袋口から見える範囲でも持ち出そうとした本の内容がバラバラだ。
「こ、子供には温かい心で許してあげるのが一番だと思います……ので、見逃して下さい
お願ひします！」

跪いて頭を垂れる様は幼い見た目でありながら堂に入つており、見る者に同情を抱か
せる光景である。しかしそれで矛を收めるほど、目の前の女性は甘く無い。

いや、初めのうちはこれで事が済んでいたのだが、あまりにも言つても聞かないので、
最近はネイチャが泣きそうになるまでお仕置きをしている。つまり、ネイチャの自業自
得。

「そう、それが貴女の答えというわけ。まつたく、どうしようもない——大馬鹿者ね」
「ふえ……？　ちよ、おまツ！　いつだあーー！」

手をかざした。ディー・ネはネイチャへ向けて魔光弾を放つ。

バツシーンッ、と小気味良い音とセットでネイチャの悲鳴が上がる。それに気をよくしたのか次々と魔力弾を生成していく。

これでネイチャが素直に誤つていれば手心も加えていただろうに、下手に言い逃れようとしたバチが当たつたというべきか。

「ううう……ッ！　こ、このお……オニバツ、バババツパア!?」

ネイチャからの悪口が終わる前に再びいくつもの魔光弾を少女の顔面目掛けて解き放つ。

堪らず体を丸めて耐えるネイチャだが、一向に魔力弾の嵐が止む気配はなく、それどころかディー・ネの顔が楽しげに歪んできてさえいるのまだまだ続ける気なのだろう。「仮に本を盗み出そうとした事には目を瞑つたとして、それで私の気が済むと思つて?」「な、なにがいけないってんですかあつ!?!」

意外と痛くないのか大きな声で口答えをする余裕はあるネイチャだが、忘れてはいけないのはこうして会話をしている今も少女が魔弾を浴びせられ続けているということ。

「何がいけないか、ですって? 私が他人から詮索される事がなにより嫌いだからよ。だから私の自室に忍び込んだ時点でお前の行く末は決まつていたということ。分かつた? お馬鹿さん」

「ぐみやあああああーーッ!? ゆるしてくださいいい!!」

苛烈さの増した魔力弾を受け、つぶれた猫のような叫び声を上げるネイチャの悲鳴が泣き声に変わるまで、お仕置きはしばし続くのであった。

「あー、酷い目にあつた。まつたく、ちょっと難しい本を借りようとしたくらいで大げさなんですつて。もう」

あれからデイーネに庭掃除を言い渡されたネイチャはぶつくさ言いながらもきちんと取り組んでいる。その動きは魔力弾のダメージを感じさせないくらいに軽快そのもの。

まあ、サボつたのがバレればお仕置きが待つていてるからだろうが。

「本の二つ三つくらい貸してくれても良いのに。あのオニババ、ほんとけちんぼ」

本、と言つても。この場合意味するものは魔導書の類である。

魔女であるデイーネの所有する魔導書は膨大であり、中には本の内容を見ただけで呪い殺される代物まであるのだから、ネイチャのしようとした事がいかに危険であるか分かるというものの。

とはいって、さすがにネイチャ自身その危険性は把握してはいる。のだが、それよりも探究心が上回つてしまふのだから始末がおえない。

「はあ……ああもうつ。いい加減、初心者用の魔法でも良いから教えてくれれば良いのに、なんでいつまでも家事か雑用しかさせないのさ」

居候の身としては殊勝な心がけであるが、相手が相手であるのでディーネを前にして強くも言えず、こうして不満を吐き出すのが日課となつていて。

なぜなら、名前以外の記憶と持ち物もない状態でこの家の前で立ち尽くしていたネイチャを招き入れたのが、他ならぬディーネなのだから。そのことについてはネイチャも感謝しており、こうして毎日の仕事にも真面目に取り組んでいる。

けれどもと少女は思う。こんなにも近くに魔女がいるのだから自分も魔法というものを体験してみたい——本や空想ではない本物の。

だといふのに読ませられるものと言つたら歴史書やミステリーに冒險物、果てにはホラー物といった多様な小説ばかり。少女の期待する魔導書は一度も与えられずにいる。

だからといってディーネから渡される本がつまらないと言うことはなく、むしろネイチャに刺さる内容のものばかりなので気づいたら時間を忘れ読み耽つてている事なんてしそつちゅうである。

「でもまあ、短気ですぐ怒つて褒めてもくれないディーネの他に不満はあまりないし、生

活にも満足しているし……あとは熱中できるナニかがあればなあ。はーあ」

最近独り言が増えたなど内心落ち込み二度目の長いため息をつくも、気休めにもならずさらに気分が落ち込むだけだった。

「それに外の世界にも行っちゃいけないって。子供みたいに扱つて……！　これじゃ何も楽しみが無いじやん。子供なんだから外で遊ばせろってんですよ……ん？　ま、いつか」

デイーネと暮らし始めてからは外出した事はなく、いまだに外とはどんな世界なのか見たことがないし知る機会もない。

仮に無断で出ようとするものならお仕置き確定であり、許可を取ろうとしても取りつく島もない。必然的に外のことを探り得る手段は本だけとなるのだ。

可哀想な自分、と思いながらネイチャは先の発言に違和感を覚えるも特に深く考えはせず、テキパキと庭掃除を終わらせた。

その後、いつも以上に眉根を寄せたデイーネから追加で家の中の掃除と洗濯を言い渡され、おまけにしつかりとダメ出しも受け何度かやり直しさせられたネイチャは、心身共にへとへとなつて自室へと戻りそのままベッドに直行し倒れ込んだ。

「つ、つつかれたあー……性悪デイーネめえ。自分でやればあつという間に魔法で全部終わらせられるくせに、わざわざ私にやらせるなんて……まあ、なにかやる事ないか聞

いたの私なんだけどさ」

衣装棚と机、あとちょっとした小物があるだけのシンプルな部屋。そこがネイチャの自室となつてゐる。

「さて、と。疲れきつた心と身体を癒さなきや……」

ヨロヨロと立ち上がりおぼつかない足取りで机に向かい、なにやら探し物をしているのか引き出しの中をあさりだす。

「いつ見ても綺麗だなあ……」

大事そうに取り出したのは一輪の花。それを見つめるネイチャの表情は不機嫌なものからやわらかいものへと変わつていた。

その花は暗い色で、ながら透明感のある色合いをし、花弁にはまるで数々の星を散りばめたのではと錯覚してしまって、美しく輝く粒があり、見た者を釘付けにするほどの美麗さを宿している。

「ふふん、家の周りにも綺麗な花はあるけど、見た目で言つたらこの花にはかなわないよね。うん、絶対」

その花は唯一彼女の私物というべきもので、意識が覚醒した時にポケットに入つていたものだ。

この花に触れたりしてみると不思議と力が湧いてくる気がするので、落ち込んだ時と

かは触つたりして力をもらうなどして御守り代わりとしても大事にしている。

言い換えればただ一つの宝物。

たとえディーネに見つかり奪われようとするものなら噛み付いてでも抵抗するだろう。それだけ少女にとつて思い入れ深い物なのだ。

「あと、は。ご飯食べてお風呂入つて寝るだけ。今日も一日おつかれさま！　つて誰も聞いてないんだけどね」

一日の締めくくりとして習慣になつた言葉を言い終え、花を元の場所に隠し部屋を出た。

そして少女が居なくなり静まり返つた部屋。そんな中、引き出しに眠る花は仄かに煌いていた。

「風呂場で遊ぶなどいつも言つているでしょうツ、このド阿呆!!」

「ひいいいッ！　ごめんなさいい〜」

子供が遊ぶにちょうど良い広さの浴槽でいつものように泳ぎはしゃいでいたネイチヤは、もはやお決まりとなつたお叱りを受けるも、頭の中は明日はどうやってバレずに泳ぐか模索しているのだつた。懲りない少女だ。

これがネイチャの日常。これこそ少女の平和な世界。これはいつか誰かが追い求めた安息の日々——。

第二話 夢に咲く花

「ふう、今回の小説もおもしろかつたあ。特に主人公アリオとリーチ姫の最後の掛け合いなんて最高」

もはや趣味の一つになつてゐる読書を終え感慨にふける少女ネイチャ。

今回少女が読んだのはありふれた冒險物語。内容はどこにでもある話で、主人公が悪者を打ち倒し最後にはヒロインの姫と結ばれるというハッピーエンドで終わるもの。

「やっぱり王道が一番、これだけは絶対だね。うん」

自室でひとり満足げに頷くネイチャは、しばらく外の景色を見ていた。

窓の向こう側に見える庭、そこにはデイ一ネが植えた様々な種類の花が咲き、さらに奥に目を向ければ大森林がのぞいている。

この家は緑に満たされた自然あふれる立地となつており、穏やかに時を過ごすに最適な場所となつてゐる。

しかし場所が場所なだけに、ネイチャは未だ自分達以外の人間を見たことがなく、どうせならもうちよつと活気のある場所が良かつたと、がつかりした想いが胸にあつた。

「ふあーああ……集中して読んでたからかな？ なんだか眠くなっちゃった……」

急な睡魔にみまわれたネイチャは机に突つ伏し、窓から差し込む日の光を浴びる。ちようどいい感じの温もりが背中から染み渡り、あまりの心地よさに自然と瞼が落ちてくる。

「ちょっとだけ、ちょっとだけ目を閉じるだけ……寝たら……」デイーネに、怒られちゃう……から」

そしてとうとう眠気に逆らえなくなつたネイチャは小さな寝息を立てて夢の中へ誘われた。

そんな中、引き出しの中では一輪の花が淡い光を放つていた——。

そこは、花が咲き誇る丘。

満点の星空に浮かぶ星々の輝きが丘を照らし少女を迎える。足元には辺り一面を覆う美しく煌く花々が咲き乱れ、天然の光る絨毯となしている。

さらに、花の上品で芳しい香りが鼻腔をくすぐり、爽やかな気分にさせるこの地はまさにユートピアという言葉が似合う。

少女はそこにいるだけで全てが満たされるかのようを感じた。

(やつた、久々にこの場所に来れた)

ネイチャは夢で何度かこの場所に訪れていた。来れる頻度は低いので滅多にこの景色を見れないの自然と少女は上機嫌になる。

しかし不思議なことに外にも出たこともない筈だというのに、最初の頃からここを懐かしいような、それでいて少し寂しい場所という想いが胸中を占めていた。

(なんだろ、声……？　あ、もしかして歌かな)

どこか遠くから聞こえてくる女性の綺麗な声。透き通るような声で奏でる言葉は聴くものを惹きつける魅力が含まれていた。不思議とそれを聴いているだけで、なんでもできそうという自信が込み上げてくるのだ。

ネイチャの頭の中でメロディーが浮かび、いつしか自分の歌のようにスラスラと言葉を紡ぎ出す——ネイチャがこの歌を聴くのは初めてだというのに。

(きっとこういう所が天国っていうんだろうな)
気分がいい、今なら何でも出来る気がする。

このまま世界を自分の理想通りに変えてしまえそうな全能感が少女の心を満たしていく。

そしてこのままここにいたら、自分についてなにか分かる。そんな気がするのだ。

いつまでもこの場所にいたい。本心からそう願うネイチャであつたが、夢というのは醒めるモノ。急速に意識が覚醒していくのを感じながら、最後まで誰かの歌う声に耳を傾け続けていた。

ベッドに横になる少女は神秘的であつた。

薄クリーム色の長い髪がベッドに広がり、日の光に照らされた影響で美しく輝き、幼いながらも整った顔立ちと相まって神秘的に見える。はずなのだが、少女のだらけぎつた寝顔がそれを台無しにしている。

「ふえへへ、わたしがしんせかいの神になるのだ〜あああ……んふふ」

とんでもない寝言を言つたり、呆けた口からよだれが垂れ枕元を汚しているのにも気づかず今も夢を見ているようである。

だらしのない緩み切つた顔が歪み、だんだんとしかめつ面へと変わる。顔に差し込む眩い光によつて目を覚まさそうとしているのだ。

「んんう……むう」

ベッドからもそもそも起き上がつたネイチャの顔は寝ぼけきつている。
寝起きに弱いネイチャは、朝日でショボショボする目を擦り大きく伸びをする。

「ん〜〜つ、はあ。気付いたら寝ちゃつてた……でもまだ朝だからだいじよぶ。あれ、でもたしか寝る前はお昼過ぎだつたような——あれれ?」

みるみるうちに寝ぼけ顔から難しい顔、悟り顔から顔が青ざめていく様は見事であり、まさに百面相といった具合だ。

「もしかして丸一日寝てた……? ツ、やつば！」

こんなに寝てしまつたのも、全部あの夢のせいだと口にしながら慌てて飛び起きるネイチャだつたが、運悪くシーツが足に絡まり派手に転倒——しかも顔面から。「べにゅッ！」

派手に顔面を打ち付けたネイチャは、痛みで滲む涙もなんのその。素早く立ち上がりいつもの服に手早く着替える。しかし、どれだけ急いでも結果は変わらないというの是言うまでもない。

「やばいやばいやばい!! ディーネにどやされるつ」

彼女達の住む家であるが、二人で住むにはいささか大きい家ということもあって、リビングに辿り着くには少し時間がかかる。自室のドアからリビングに続く廊下を時間すら惜しむようにバタバタと走る少女。そして――

「居候の癖に一日中寝てられるだなんて、良いご身分ね。居候のくせに」

扉を開けた瞬間にお叱りが始まつた。

少女に背を向け木製の椅子に座り、分厚い本を読んでくつろぐ、ディー・ネは、怒りとうより呆れたと言わんばかりの声音でネイ・チャを迎える。

「すいません……で、でも。そのお、二回も居候つて言わなくとも」

「それが事実でしょう——つて、貴女その顔どうしたの」

「え？」

振り向いたディー・ネが怪訝な顔でネイ・チャを見つめる。

何かおかしな所でもあるのだろうかとペタペタ自分の顔を触るネイ・チャは、ふと手に嫌な感触を察知した。

「…………うわ、鼻血」

結構な量の血が少女の手を赤く染めていた。

鉄臭い臭いと自分の手を汚す血に思わず顔が引きつる。どうやらさつき顔を打ち付けた時に鼻血が出てしまっていたようだ。自覚したからか、ズキズキと鼻が痛みを訴えはじめる。

「これはですね、あのう……へ、へんな夢を見てしまって、ですね。そのせいです、きっと

この言い訳では妙な誤解を生むのでは? と、後になつてネイ・チャは気づく。

恐る恐るディー・ネの方を伺うも、表情にこれといった変化はなく、ただ少女の瞳を見

「つめるだけ。

「とりあえず……そのみつともない有様を何とかなさい。見るに耐えない」

これ以上は見てられないと言った態度で再び本へ視線を戻すディー・ネ。特にそれ以上何かを言わることはなくネイチャは安心半分、不満半分で洗面所へと顔を洗いにいくのだった。

「良かつた服には血、付いてないみたい」

ようやく鼻血が止まり一安心したネイチャは、鏡に写る自分の姿を確認し終え一息ついていると、不意に後ろから声がかかる。

「服は良くても廊下にアンタの血がここまで続いてたのだけど」「げつ、ディー・ネ……あいだッ!」

眉根を寄せた不機嫌な顔でディー・ネが背後に立っていた。

たまらず本音を漏らすネイチャだつたが、それを聞き流すディー・ネではなく、魔力を

灯した手で少女の頭をしばいた。

「血の方は綺麗にしておいたわ。それと、朝食の時間だから早く準備なさい」

言葉短くそう告げると、ディー・ネは足早にその場を立ち去っていく。

「そういえば、お腹すいたなあ」

思えば昨日から二食、食事を抜いていたということになる。それは空腹にもなると言

うもの。

そして味だけでいえばディーネの料理は絶品であり、ネイチャが密かに楽しみにしていることの一つでもある。そんな訳で、善は急げと少女もそそくさとリビングへ向かうのだった。

彼女達の食事はよく言えば上品、悪く言えば冷たい雰囲気のものであつた。

(おいしいにはおいしいんだけど、心からおいしいと感じられないんですね……それでも美味しいけど)

そう、二人の食事時は食器の触れ合う音のみが室内を奏でるのみで、会話という会話もない。

けれど喧嘩しているわけでもなく、お互い嫌いあつてていると言うわけでもない。たぶん……と、心中で思うネイチャは、なにかのきつかけがあればもしかしたら会話が出来ると考え、初めて食事中に話しかけてみようとチラとディーネの顔を伺う。その様は拾われてきた捨て猫を彷彿とさせる。

対して既に食べ終えコーヒーを口にしていたディーネもネイチャを見ていたようで、目がばつちりと合う。明からさまに忌々しげに顔を歪ませてきた。話しかけるなオーラ全開だ。

(うん。無理)

心中で爽やかな笑顔を浮かべる

本来なら団欒としている筈の食事時。最近読んだ小説にそういうった場面が描かれ、それに憧れているネイチャは小さくため息をつく。また、いつも通りの寂しい食事となつてしまつたと。

「ねえ。貴女がここに来てどれくらい経つかしら」

珍しく——というより、初めてデイー^一ネから食事中に話しかけられたと驚くネイチャは、突拍子のない質問に疑問符を浮かべながらも、頭の中では過ごしてきた年月を計算する。

「えと……たぶん、二年くらいにはなるかと?」

思い出すのは苦い思い出ばかりだったので素早く思考を切り替えた。

「そう……そのくらいよね……でも何故かしら、貴女とはもつと時間を共にした感じがするのよ。こういうの、なんて言うのかしら——そうね」

そこで一度言葉を区切つたデイー^一ネは、コーヒーを静かにすすり一言付け足す。

「率直に言えば気持ちが悪い」

「辛辣すぎでは?」

身も蓋もない一言についツツコミ気味で応えてしまうネイチャだつたが、自身もデイー^一ネに対して親近感がわく時があつたと思い返し、言われてみればそうかなと納得

してしまった。

「思つたことは素直に言うタイプなのよ、私。

貴女も何か言いたいことがあるのなら包み隠さず言いなさい」

「お——オウ、イエス」

お前が毎回言わせないんだろうと喉まで出かかった言葉を飲み込み、よく分からぬ誤魔化しをするネイチャであつた。

「け、けどそれだけ毎日が充実しているから過ごした時間が長く感じる。なんて、考えられるかもですよよね？」

「…………はつ」

完全にバカにされた。

端麗な顔を愉悦に染め、切れ長の目を細めて鼻で嗤う。ディー・ネはまさに魔女と呼ぶに相応しく、異性ならば一目惚れしてしまうほどに妖艶だつた。

そんなディー・ネを悔しがりながら見つめるネイチャであつたが、初めて食事中に会話が出来たとちょっと嬉しくなり怒りを鎮める。

そして上機嫌な少女は食べ終えた食器を片付けながら鼻歌を歌う、あの夢で聞いた美しき旋律を。

さすがに歌の歌詞までは記憶に留まつてはいなかつたが、メロディーだけは鮮明に今

もネイチャの頭の中でなり続けていたこともあつて、自分でもなかなか良く歌えているのでは？ と気分良く口ずさんでいると、それを聞いていたディー・ネの顔が今までのどちらとも違う表情となっていた。

困惑、焦燥、最後に哀しげな顔つきへ変わる。

今日はディー・ネの珍しい一面を見れるなあ、と呑気に思うネイチャへ詰め寄るディー・ネ。

「その曲、どこで聞いたの……」

「え？ えと、夢で聞きました。はい」

「夢で？ 嘘は……付いているわけでもなさそうね」

「もしかしてディー・ネはこの曲、知つてるんですか？」

淡い期待を胸に抱き、喜色の滲んだ声で尋ねる少女の蒼い瞳はいつも以上に輝いていた。

「知つているもなにも、それは私の作つたモノよ」

「……えつ……マジですか、それ？」

「まさかまた私の部屋に忍び込んで——いや、曲調は書いていなかつた筈……じやあ一

体」

口元に手を当て思考に没入しているディー・ネにネイチャの声は届いていない。試し

に少女が小声でオニババと呟くと、しつかり聞こえているようで魔力弾をフォーユーザれる。これぞ地獄耳。

結局、そのあとはいつも通り掃除洗濯を言い渡され、こき使われ疲れきった身体を休めるため床につくのだった。

今日はあの夢は見なかつた。

第三話 未来への一步

「それで？ 今日は一体なにをしでかしたのかしら。私が忙しい所にのることやつて
きたということは、余程のことなのでしょうね」

「え、えくと…………」

毎度お馴染みお叱りを受けるネイチャ。しかし今日はいつもと少し違うようだ。

罪を告白するかのように——実際そうなのだが、これまでに見たことのないくらい申
し訳なさそうな様子を見せるネイチャにディー・ネは訝しむ、今度はなにをやらかしたの
だろうと。

その視線を受けて少女はさらに冷や汗を流すことに。

何故こんな事になつたのかは、少し前に遡る。

この日もネイチャは例によつてディー・ネの自室へと忍び込んでいた。もはや一日の
ノルマにでもしているのかという執念っぷりである。

「早く盗み出さないとバレちゃうバレちゃう。えーと、どの本がいいかな」
きよろきよろと見回していると、ふと目に止まる見覚えのあるものが見えた。

「——え？」

それはネイチャの宝物である花だつた。

それがどういうわけかディーネの部屋の机に置いてあるのだから、驚きもひとしおであろう。

「ちよちよちよツ、なんでこれがこんなとこにあるの!? はつ！ あんのオニババツ、私の部屋から盗み出したんだ！」

ふつふつと湧き上がる怒りの炎を燃やす少女は、今にでも殴り込みに行きたいという衝動をなんとか抑え、大事な宝物を取り戻すべく花に手を伸ばす。

「まつたくもう。ん？ あれ……」

大切そうに花を手に取り、そこで気づく。それは――

「これ、違うやつじゃん……」

見た目こそそつくりではあるが、彼女の宝物とは別物だつたのだ。それに何か物足りなさを感じる。いつもなら触れているだけで力が湧いてくる感覚がある筈が、この花からは何も感じない。

それが意味するのは――よく似た偽物。

「ふうむ、でもこれはこれで」

その花はまるで造られたかのような感触で、いつも触れているものとはまた違つた触

り心地に夢中になる。

例えるならこつちはつるつるした無機質な感触で、いつも触れている方はすべすべと
していながら温かみを感じるといった違いがあつた。

こねこねと粘土細工のように形が変わる花にお熱な少女はある推測をたてる。
こんなにもあの花と似通つてゐるのだから、何かしらの方法で同じ効力を引き出すこ
とができるかもしれない、と。

「念じてみたらもしかしたら良いかも……んーと、ち、力を分けてください」

こんなので何か変わるわけないと期待はしていなかつた。そしてネイチャの予想通
り変化なし。

“やつぱダメか”と、ひとりごちる。

次に意識を花に向け二度目のチャレンジを行う。

(どうか、私に力を分けてください。あなたと共に生きたいんです)

誠意のこもつた祈りが通じたのか、はたまた偶然の産物か、しかし花から温かいなに
かが流されるのを少女は感じていた。

「おおくつ、これですよこれ！　この感覚が堪らないんですよ！」

調子に乗つたネイチャはどんどんと思念を強めていく。思いの強さに比例して、なに
かが少女を満たしていく。それに喜びさらに想いを強める。そして——花が碎けた。

パリンと小さく、しかしこまでも耳に残るガラスの割れるような音が木靈す。

儚く散つてしまつた花であつた欠片を啞然と見つめる少女は、なにが起きたのかしばし理解できなかつたが、数秒もしないうちにガタガタと震え始める。

「これ、ものすづこやばいのでは……？」

ディーネの私物を過程はどうあれ壊してしまつたのだ、ただで済むはずがない。しかも、どう見たつて貴重なものと分かる代物を原型を残さず碎いてしまつたのだから絶望するには十分だろう。

そこへ森に出かけていたディーネが戻つてくるのを窓から発見し、あたふたするネイチヤ。最悪のタイミングだ。

まずは出迎えなければならないと、掌に残つている欠片をポケットにしまい玄関へ向かうのだった――。

「もう一度だけ聞くわ。私の機嫌を損ねる事でどんなことをしたの？」

そして話は戻り、出迎えに来たネイチヤの隠しきれない罪悪感を見抜いてか、ディーネが出会い頭に確信をつく質問を投げかけてくる。

声を低くし威圧感を放ちながら二度目の質問を正面から受けてしまえば、さしものネイチヤも根負けしてしまう。それでも躊躇いながら時間を引き伸ばそうとするのはご愛嬌。

「な、なぜそうだと思います、か？」

「どれだけアンタの悪事に付き合つてきたと思つているの？　どんな聲音でどんな目配りをしているのか、それと呼吸のリズム。それだけの情報で大体の察つしはつくというもの」

なんで魔女なのにそんな原始的な判断基準をしているんだと内心ツッコむネイチャは、これはいくらごまかそうと無駄だと諦め素直に罪を告白する事にした。

「実は、ですね……これ、壊してしまって……」

ポケットから先ほど碎けた花の欠片を恐る恐るといった様子でディーネの前にさらす。

のちに来たる特大のお仕置きにネイチャは身体を震わせ目を瞑る。

「これは……ヨーヴアレー
宇宙花」

「ゆに、え？」

「その名前よ。見た目が星空に似通つてることからその名が付けられた花。まつたく安直な名前よね」

聞き慣れない単語に恐怖を抑えて聞き返せたのは、一重にこれがどんな代物か気になつたからだろう。まさか普通に応えてくれるとは思つていなかつたネイチャは、花の名前の由来を知ることができたと心の中でガツツポーズ。

「その花を壊したと言ったわね。これはそう簡単に碎けるものではない筈よ。ましてやこんなバラバラになるなんて……貴女、一体なにをしたの？」

ネイチャの予想に反して怒らないどころか、興味を持つたように口に笑みを浮かべ花の欠片を見続けるディーネの表情は、面白いものを見つけたといわんばかりの顔だった。

「こう、力を分けてくれ。みたいな感じで念じ続けてたらこうなりました……はい」説明するにも少女の語彙力ではこれが限界であつた。しかし実際そうとしか言えないのだから仕方ない。

それでも、他人が聞けばなんともふわふわして容量の得ない説明としか受け取らないだろう。

「ふーん……そういうこと」

だというのにディーネはどこか納得した雰囲気で意外な一言を少女へ告げる。

「……やつぱり興味深いわ、貴女」

「うえッ！」

少女へ向けた柔らかな笑顔。何度も見てきた怒りや、嘲りを含んだどれとも違う、まっすぐで綺麗な笑顔。思わず見惚れてしまつた事にネイチャは氣恥ずかしさを覚えた。

ディー・ネつてこんな笑顔が出来るんだと場違いな事に思考を凝らしているのも束の間。

「いいわ、この事については許してあげる。ただし——」

目も覚めるような微笑から一転、見慣れた笑顔。つまり怒りを多分に含んだものへと表情を変えた。

「私の自室に無断で入り込んだ事については許さないから、そのつもりで」「で、ですよね〜」

つい先日も同じ事でお仕置きをされたばかり。だからこの時はネイチャ自身お仕置きの内容は前と似たようなものだと思い込んでいた。

だが、かのディー・ネがそんな単純な方法を取るわけはない、何故なら彼女は魔女。

けれど幼い少女にそこまでの思慮深さはなく、来たる悪夢に気づかぬまま包まれるのだった。

「お願ひです……つ！ もう、やめてッ」

あれから自分の部屋へと連行されたネイチャは部屋に入るなり、ディー・ネの魔法で体の自由を奪われベッドに放り投げられた。それでも、口を食いしばりながらディー・ネを

睨む少女の瞳には強い意思がともつていた。

「どう？ 自分の知られたくない領域を乱暴に見られる気分は」
嬲るようにゆっくりとした手つきでネイチャの大切な場所を外部に晒す。それに目を見開いた少女から焦燥の声が上がる。

「あ、ああっ……、後生ですのでどうか——ああッ、そこはつ！」

「ふーん……」。見た所きれいにしているようだけど、なにか匂うわね」
隅々まで視線を巡らすディーネは、中から僅かに香る匂いを目印に辿る。

ネイチャはくりくりとした蒼い瞳に涙を滲みませ、今にも泣き出しそうな表情で呼び止める。

「だめ……、そこは、ほんとにダメなんです……！」

そして、とうとう見つけたネイチャのシークレットスポットへ、無遠慮に細くししなやかな指でまさぐるディーネの表情は楽しげで、どこか加虐的な色を含んでいた。

そしてついにネイチャは沈痛の叫びをあげる。

「うああーーん！ ディーネに取られたあ!! 私の、はな、あああ！」

ディーネの手にはネイチャの宝物である美しい花が収まっていた。

そう、彼女はいかに他者からの詮索が気分の悪いものか思い知らせるために、意趣返しとしてネイチャの自室を物色、さらには引き出しの隠し板までも外し、少女の大切な

ものを本人の目の前で奪つてみせたのだ。

断じて卑猥な秘め事を行つていたわけではない。

「なるほど、だから私の部屋にあつた花に目をつけたと。道理で、他のものに手を出さなかつたわけね」

「こんちくしょーう！　返せ私の花あ！！　鬼！悪魔！　デイーネ！」

まるで子供の癪癩である。

相変わらず少女はベッドに身を預けた状態だが、特に何かで縛られているようでもない。しかし、まるで何かに拘束されているかのように、もぞもぞ体をよじらせるだけで一向に立ち上がる気配はない。依然、デイーネの魔法は解かれていないのだ。

「これがそんなに大事？」

「うぐ……っ、だ、大事……です」

下手に嘘をついてもどうせバレると分かつてゐるネイチャは口籠もりながら答える。

彼女は学習できないのではない、懲りない性格なだけなのだ。

デイーネは指を一つ鳴らすとネイチャにかけていた魔法を解除した。

「あれ……？　どうして」

「別にこの花をどうこうするつもりはないわ。ちよつとした確認をしたかつただけ」

そう言つてネイチャの前まで移動し、花を差し出す。

おずおずと自分の宝物を取り戻そうと手を伸ばす少女。警戒心を隠しもしないところを見ると、何か裏があるので考へてゐるようだ。

だがそれは杞憂に終わり、呆氣なく花はネイチャの手に渡る。

「あの……花を壊した事、怒らないんですか？」

「それはいいつて言つたでしょ」

苛立ちを乗せた声でそう言い捨てるディー・ネにネイチャは心から安堵した。宝物であるこの花を奪われる事にならなくて本当に良かつたと。

穏やかな表情をし両手で花を包み込み、胸元に寄せる姿はどこか聖女の祈りのようで優げであつた。

「けど今し方、試したい事が出来たの。もちろん協力するわよね？」

「あ、はい」

感慨にふける間もなく話を進められる。

断つたらどうなるか、分かるだろ？ という圧が込められた問いかけに半ば強制的に

頷かせられた。

ネイチャの返事を聞き、踵きびすを返したディー・ネがドアノブに手をかける。

「なら、外にでるわよ」

「何故ですか？」

だ。

彼女はドアノブにかけた手をひねりながらネイチャが今まで望んでいた言葉を紡い
「魔法を教えるからよ」

第四話 嘘と誠

図らずとも念願の魔法を教えてもらう事になつたネイチャは花が咲いたような笑顔を浮かべ、いまにでも駆け出しそうになる気持ちの昂りを押し留めてディーネの後を歩く。

女性にしては高い身長のディーネの装いは、黒のドレスに黒のケープといった暗い色だが、スリットの入つたドレスから覗く白くすらりとした脚と、腰まで伸ばした艶やかな黒髪によつて重い印象ではなく、むしろ統一されたものとなつている。

ハイヒールだというのに音を鳴らさずに歩く後ろ姿は、ネイチャから見てもモデルのようだと痛感させられるほどだ。それに比べると、どうしても見劣つてしまふ自身の子供特有の幼い身体つきに肩を落とす。

そんな考えを頭の隅に追い出し、再び笑顔でディーネの後を追う姿は、側から見ると親鳥の後を追う雛鳥のようで微笑ましいものであつた。

「やれ」

「いや、やれって……いきなりそんなこと言われましても」

庭へ辿り着くなり、対面したディーねから有無を言わせない物言いにやぶからぼうに魔法を使えと強要されたネイチャは、先までの笑顔を引っ込め眉を下げるの困り顔となつていて。

ひゅう、と風の抜ける音だけが耳に触り、二人の空気をさらに微妙なものへと変える。ほんの数分前までの微笑ましい光景が嘘のようである。

「魔法を使ってみたかったのでしょうか？」ならさつさと使ってみなさい。何度も私の魔導書を盗み見ているのだから、そのくらい出来るでしよう？」

たしかに、ネイチャはこれまでの日々で初心者用の魔導書を拝借し、ちよくちよく盗み見てきた。そしてその知識を元に魔法の基礎と扱い方を自分なりに学習してきたのだ。おかげで初級魔法ならばなんとか使えるまでになっていた。

なにせ、自分で魔法の練習するのはダメ、魔導書を読むのもダメ。そんな日々の束縛が強すぎて、いい加減ぐれてしまおうかと少し本気で考えるほどだつたのだから。

相手が悪すぎると思い出しては即断念の繰り返しであつたが……。

その激情を糧に、ついに少女は自分オリジナルの魔法を会得するに至つた。まだひとつだけだが……。

いつかこの魔法を使ってディーねにギャフンと言わせたい、そんな想いを胸にしまい

過ごしてきたのだ。そして今が千載一遇のチャンスであり、その時だと言えるだろう。しかし、普通に考えれば何の練習や見本も無く魔法を使つてみるというのは、いささか無理があるというもの。まさかこちらの魔法知識を把握しているわけでもないだろうし、せめてちよつとした手ほどきをしてくれてもいいと思う。そしたら少しは気も楽になるというのに。

さすがに理不尽だとネイチャは頬を膨らませ、可愛らしく不満ですう。と抗議をするのだが――

「その不快な顔、今すぐに止まないと一生そのままになる魔法をかけてあげるけど、どうする？」

「やめますやめます！　今すぐやめます!!　だから魔法は無しの方向でお願ひします！」

「だから魔法を使えと言つてているでしよう？　このバカ」

「あてつ！　うぬう……わかりましたよ、やれば良いんですね？」

微妙に食い違つた認識から顔面に魔力弾をお見舞いされた。

そういう意味じやねえからと、心で毒づく少女に呼応してか、握り締めたこぶしに熱が帯びる。

理不尽に理不尽を重ねるスタイルに怒りの火を燃やし、それを原動力に魔力を練り出

したのだ。

やれと言われては仕方ない。せいぜい驚くといいとネイチャはほくそ笑み、魔法を安定させる為、詠唱を始める。

「ふんど忿怒よりいづる炎極の幼火よ

殼破りて世界を焼き尽くす刃となれ

燃やせ焦がせ灯せ

——胎動せよ

頭の中には魔法のイメージは出来ているが、それを実際に事象として起こすのは初めてで、どうしても不安を拭えなかつたネイチャは、ここにきて自信に溢れた表情を浮かべた。手応えありと、体の内から際限なく滾る魔力を感じたのだ。ついでに格好よく詠唱が出来たと満足げだ。

——これならいける。

「光
『フレアグロウ』!!

迫真の掛け声でオリジナル魔法を放つた——その割にネイチャの真光弾は小さく、鈍く光りながらふよふよと緩慢に進むだけ。その様は気が抜けるようで間抜けとも取れるが、よくよく見れば光球の周りがゆらゆらと揺らぎ、まるで空間をも歪めているかのようだ。そこから見て内包されている力は相当なものだと言える。油断してしまえば

致命的にもなりかねない程に。

「ふふん、それには触らないほうが良いですよ。うつかり火傷しちゃうかも——って、ちよつと!」

得意げに鼻を鳴らし挑発的な発言をするネイチャであつたが、最後まで言い終える間も無く驚きの声へと早変わりする事になつてしまふ。

何故なら、心底がつかりしたと言わんばかりにディーネはため息を吐いてから自ら魔光弾に触れたのだから。

まさか自分から直接触りにいくとは考えてもいなかつたようで、ネイチャは素つ頓狂な声を上げ慌てて止めるようと足を踏み出す。

しかし時すでに遅し。

触れた瞬間、光球から豪炎が吹き出しディーネを飲み込んだ。それでも止まらず炎は辺りに熱を撒き散らしながら火柱を立ち上げる。

呆然と炎に目を向けるネイチャはやがて高らかに笑い出した。

「……は、はーはっはっはあ!! どどど、どうです? 油断して触れたが最後、近くにいるものを飲み込み炎で焼き尽くす魔法なのでしゅ!」

見せかけに騙されてしまえば、凶悪な炎が渦となつて襲い掛かる。なんとも彼女らしい意表をかいた魔法である。しかし初めてで自分の発想を取り入れそれを魔法として

形にできる力は紛れもない天才であつた。

炎に飲み込まれていったディーネが気になつてゐるようだが、それでもどうだと言わんばかりに強がる——どもりながら。

しかし少女はある事に気づく。

「あれ？ 炎がおさまらない、なんう？ お、おかしいな……」

彼女の予想では、とつくに炎は消えているはずだつた。けれど実際は消えるどころか燃える強さが増してきてさえいる。このままで庭の花や家にまで被害が及んでしまう。

それに、ディーネの無事も確認できていない。まさか死んでしまつたのでは？ てつきり彼女ならどんなことがあつても余裕で対処するとばかり思つていたネイチャは、だんだんと不安がつのり焦りを見せ始める。

ふと、炎の熱のせいかさつきから嫌な汗が止まらず息が荒いことに気づく。それにはんだか身体の力が徐々に抜け落ちてゐる感覚にたまらず膝に手をつく。おまけとばかりに目がチカチカし始めてきた。それを眉根を寄せて気を紛らわす。

「何故、初級魔法を使わなかつたの？ 魔法をまともに使つた事のない者が、いきなり自作の魔法を使えば制御が効かなくなると、どの魔導書にもあつたはず」

火柱の中から聞き慣れた声が響いてきた事にネイチャは少し安心する。もし自分の

魔法で彼女を死なせでもしたら後味が悪いと、叱咤を受けながら安堵の息をはいた。

「ネイチャの想いとは裏腹に、今も勢いを強める炎の中でディーネの言葉は続く。

「もし私が触れずに放置していたなら、周りの木や花、果てには家にまで飛び火していた可能性が高かつたのだけれど、そこまで頭が回らなかつたのかしら。おバカさん」

そういうえば、想定よりも火が及ぶ範囲が狭いとネイチャは気づき、ディーネの言つた内容を想像し、あつたかもしれない最悪の可能性に気づきさらに顔が青ざめていく。

「『風よ吹き鳴らせウエントウス』」

詠唱を無視したディーネの魔法が発動すると、火柱周辺に強い風が巻き起こり、炎を包むように旋回を始める。それによって小規模の火の竜巻が生まれた。それでもなお、風は力を増していき旋回のスピードは早まり、それにともなうように火は風に飲み込まれていく。

「まあ、筋は悪くない。けど、自分の作り出した魔法に振り回され魔力を吸われる続けるだなんて、魔法を扱う上では致命的」

そして瞬く間に火は消化され、黒ずんだ地面と周囲に立ち上がる煙の臭いだけがネイチャが魔法を使つたという証拠となつていた。

少女は先ほどまでの強い倦怠感が治まるのを感じ、辛そうな表情をしながらも少し樂になつたと息を一つ吐く。

「なにより、たつた一度の魔法で殆どの魔力を持つていかれるだなんて——」

デイー・ネは何事も無かつたのではと思うまでに埃ひとつなく、汗の一つも見せずにどこまでもいつもと変わらない凜とした姿だった。

そんな彼女は落胆したとばかりにため息を吐くと、無情な一言を少女へと浴びせる。「貴女、才能がないわ」

「ツ!!」

失望の色を宿した真紅の瞳を向けられ、突き放すかのようなどこまでも冷たい一言にネイ・チャは心を抉られた気分だつた。

ただ叱られるのでも馬鹿にされるのとも違う。その声には失意の念がこもつていた。

それは、少女の成熟しきつていかない心を傷つけるには十分であつた。

「な、なんですか……なんで、決めつけるんですか……！　だって、これから何度も練習すれば、きっと……っ！」

それは、子供が親に見放されまいと必死に縋る時のものに酷似していた。

きつと最初だからデイー・ネの期待に添えられなかつた、だつてまともに魔法を教えてもらえていないのだからと、ネイ・チャは自分に言い聞かす。

寒くもないのに震える小さな身体を落ち着けようと両腕で自身の体を抱く。

これは恐怖。

あそこまで愚直なまでに追い求めていた魔法を自分では扱うことはできないと、他ならぬディーネに言われたのだ。

そんなはずはないと思つても、その事実がネイチャの思考を冷静にする——自分には本当に才能がないのでは?

ふらつく視界に耐えられなくなつたネイチャは蹲うずくまつてしまふ。

「……今ので分かつたことは、貴女にとつて魔法というものは毒にしかならないということ。だから二度と魔法を使わないこと、いいわね?」

どうどう我慢の限界を迎えたネイチャの瞳から次から次へと涙が溢れ頬を伝う。割り切ることのできない魔法への強い想い。それを捨てるのは今の彼女には到底できることではなかつた。

「…………いやだ……」

意地だけで紛いだ彼女の声にいつものはつらつとした雰囲気はない。たとえ魔法の完全な禁止という結果はわかり切つていても、納得なんて出来ないのだ。当然、そんな形だけの抵抗に意味はなく、近づいてくるディーネの足音にも大した反応を見せないネイチャは、じつと地面を見つめ続ける。

そんな彼女の目線に合わせるように、ディーネは屈む。

「ネイチャ」

滅多に自分の名前を呼ぶ事のないデイー・ネが名を呼んだ。それこそ今まで暮らしてきた中で数える程度しか呼ばれることは無かつたのだ。

久々に名前を呼ばれた事に反応してか、そろそろと視線をデイー・ネへと向ける。

「才能というものは、生まれ持つた時に全て決まるものではないわ。その後の過程で花咲くこともあるれば、何もなく埋もれてしまうことだつてある。どちらに天秤が傾くかは本人次第。だから――」

潤みきつたネイチャの瞳を真っ直ぐ見つめ言葉を紡ぐデイー・ネは真摯であつた。彼女もまたネイチャへ言い聞かせるかのように言葉を選んでいるみたいであつたのだから。

「決して諦めないこと。魔法一つとっても違う道はあるはず、焦つてはダメなの」

何故こんな時にそんな優しく諭してくるのだろうか、いつものように突き放す言い方をしてくれば対抗心を燃やし食い下がるというのに。そうであつたなら、ここまで泣き出しあくなることもなかつただろうと、その優しさに少女の嗚咽が止まらなくなつた。

「だからお願ひ。今は魔法を使わないで」

こんな真っ直ぐに言葉をかられたのは初めてであつた。魔力弾をぶつけられるでも、泣き震えるまで叱られるでもなく、本当に心配するかのように。

ここまで今までと違う方法で言い聞かせられればネイチャにも察しはつく。なにかしらの理由で自分は魔法を使つてはいけないのだと、単純な話で済む問題ではないのかかもしれない。

いまだに燐の執着心を必死に押し込め、ネイチャは力なく頷いた。

それを見届けたディーネは立ち上がり、少女に背を向ける。

「ほら戻るわよ」

そしてこれ以上はやさしくはしないという意思表示をするかのように一人歩き出す。その背後では今もすすり泣くネイチャの声、それが彼女がどれだけの失意に苛まれているのかを物語つているようで、ディーネは後味の悪さを感じていた。

もう少しやり方はあつたかもしれないと眉間に寄せ、僅かだけ後悔の念を抱く。やがて、面倒ね。と咳き口をへの字に歪め、さていつまでも付いて来そうにない少女にどう声を掛けたものかと考える。

「ちよつと、いつまでそこにいるつも……り……っ」

煩わしげに後ろを振り返ったディーネの瞳が揺れる。

その視線の先には力なく倒れるネイチャの姿があつた。

それを認めた瞬間、ディーネは焦った表情で駆け寄り彼女を抱き起こす。そしてネイチャの顔を覗き込んだ。いつもの天真爛漫な表情は弱り切つたものへと変わり、身体は

熱が感じられないくらい冷たくなつてゐる。そのせいか肩を小さく震わせており、今にでも生き絶えてしまいそうに見えた。

「これは、魔力欠乏症……」

魔力欠乏症。それは魔力の枯渇から引き起こされる症状。魔力というのはこの世に生きとし生きる者になくてはならない存在。魔女が魔法を扱うためにはもちろん魔力が必要となり、魔力保有量が多い分それだけ有利になる。

魔力量が多くれば多いだけ生命力に溢れ、逆に少なければ病弱な体質になりやすい。そして、もし全ての魔力を失つてしまえば待つてているのは“死”。

それ故に魔力量は一定で保たれなければならない。万が一、一度に魔力を大量に消費したとしても、生命維持として一定のラインで魔力が保たれるようにならざる者でも体内の魔力回路で調節されるものなのだ。

それだというのにネイチャの魔力は殆ど残つておらず、ほぼゼロに近い。

——ありえない。

ディーネは即断する。いくら少女が特異な存在であるにしても、この世界の理に逆らう事は出来ないはず。

では一体これはどういうことなのか？　これまで暮らしてきた日々を振り返つても、この少女について分からぬことだらけだ。

何か、彼女には秘密がある。それもとてつもないくらいの。

だからネイチャをここで失うわけにはいかないと判断したディーネは、とある方法に辿り着く。

最も効率よく魔力を分け与える手段。それは——粘膜との触れ合い。

現状それしか無い。本当は唾棄すべき方法であるが、こんな状況では仕方ない。と、言い訳じみた思考をしながらも躊躇いがちに少女の唇へと自分の唇を近づけ、そして——

「ん~うん……寒い、つらい……あれ……？」 ディーネ

氣を失っていたネイチャがうつすらと目を開け、弱々しい声でディーネへ声をかけてきた。どうやら意識が戻ったようだ。

絶妙な間の悪さにディーネは残像を残す速さで顔を引き離す。しかし目を覚ましたからと言つても、一刻も早く魔力を与えなければならぬ事に変わりはない。そして咄嗟の判断でディーネが導き出したのは、

「なに、してるですか、ばあ!?」

ネイチャの鼻の穴に自身の指を突っ込むという暴挙であった。双方、女性にとつてまるまじき醜態である。

しかし片側だけの粘膜接触だけと言えども、ディーネから送られる魔力は膨大だ。必

然、効率よく魔力がネイチャへと供給され、みるみる内に少女の血色が良くなつていく。

「はががが、はががああ……も、もげぐう」

氣分が悪くなり気付いたら氣絶していて、そして目を覚ましたら鼻に指を突っ込まれているという状況にひたすら混乱するしかないネイチャはされるがままであり、せつかくの顔立ちの良さが目も当てられない状態である。

「いいからそのまま意識を失つてろ」

言葉遣いが乱暴な時は本気で機嫌が悪いというサイン。そのわけに思い当たる節は今はいはずなのにと、困惑が強まるネイチャは絶対ゆるさんとディーネを睨もうとする。が、指ごと鼻を強引に引っ張られ視界が横へとずらされる。

しかし一瞬だけネイチャから見えたディーネの顔はほんのり赤く染まつていたとか。

第五話　来たる白きモノ

私は一体どこで間違えたのだろう。幸せになろうと願つたあの日から？　あるいはあの日、彼女に誓つた時から？

——わからない。

わからぬいけど、一つ言えるのはこんな願いものを求めていたわけではないということ。「なんで……」

どうしてこんな非道な事でしか願いを叶えられない。

何故こんなにも取り返しのつかない状況となつて世界は私を苦しめる。ようやくここまで至つたんだ。

大切なものを切り捨ててまで進み続けてきた。

この手を血に染め死ぬ思いで歩み続けてきた。

それはここに辿り着く事だけを生きる希望としていたから。

それなのになぜ、よりによつてその希望に裏切られ、自分の願いは遠ざかつてしまうのだろう。

あまりの不条理に唸るような、自分でも驚く程低い声が絞り出される。

「——ふざ、けるなっ」

やつとのことで、これまで追い求めて来た未来が目の前に見えてきたんだ。
それなのに、なんでその未来によつて私の夢が水泡のように脆く消え去らなければならぬ。これ以上ない後悔を感じる。

「私は、なんのために……」

全てが無意味だつた。

これで今まで私を支えてきた信念が無くなつてしまつた。

いや——きっと本当はどこかでこうなる事は分かつていたのだろう。だから彼女達に私は……そもそも、どうでも良い。

求めてやまなかつたもの、そんなのは最初から叶うはずなど無い夢物語だつたのだから。

私はまんまとそれに踊らされ、救いようのない道化と成り果てたのだ。

「……ふふツ」

全てが音を立てて碎ける音がした。

きつとこの瞬間、私の心は壊れてしまつたのだろう。

「はははツ」

笑いたいわけじゃないのに笑うのが止まらない。

「はつはははははっ！ あつははははハハハツ！」

狂つたように笑い続ける自分をどこか遠くに感じ、絶え間なく続く煩わしい雑音を耳にしながら私は静かに涙を流していた。

もう戻れないのだと理解わかつてしまつたから——。

「あーうー……ほんと、酷い目にあつだ」

ディーネからの魔力譲渡によつて危機一髪の所で体調が回復したネイチャは涙を浮かべ、若干鼻声ぎみで赤くなつてしまつた鼻をさすり痛みを紛らわしている。それでもすつかり元気になつた彼女は土や砂で汚れた服や体を綺麗にするため、しつかりとした足取りで浴室へと向かつてゐる。

「魔法、もう使っちゃダメなんだよね……」

厳しい現実を突きつけられたばかりで、まだ心の整理が出来ていない様子を見せるネイチャ。

初めて魔法を扱い、その手応えからもしかしたらもつと上のレベルまで使えるようにな

なるかもしないと、そう感じたにも関わらず無情にも魔法使用の禁止を言い渡されたショツクはしばらく抜けそうにない。

「あれ……？ なんだろ、これ……癌、かな？」

洗面所で衣服を脱ぎ終えたネイチャの目についたのは自身の身体、胸元に見慣れない癌のようなものだつた。しかしそれは癌にも見えるが、何かの紋章のようで例えるなら花のような形状を成している。

不思議に思ったネイチャは何かの汚れかもと考え、なんとなしに触れてみる。

「ぐっぴ！」

その結果、頭から爪先まで強い電撃が流れた感覚を味わう羽目になつた。全身に広がる強い痺れに戸惑い頭の中が疑問符だらけになるネイチャ。

もちろんこんな事は今までなかつた。その事から、この得体の知れない癌に警戒をすると同時に好奇心を抱く。もしやお約束の主人公の覚醒イベントなのではないかと、小説の登場人物に自信を投影する。

なんにせよ、ここはディーねに伝えておくのが良いだろう。

「なんだろ、これ。ディーねに言うべきかな？」

はつ！ ま、までよ。も、もしかして……この癌はなんなか知るために解剖でもさ

れて研究されるかも……！」

実験対象として隅から隅まで解剖でもされるのでは？

ここにきて変な方に考えを広めたネイチャの導き出した答えがこれだつた。
しかし、可能性としては低いにしても、あり得てしまう未来に戦慄するネイチャは結局このまま放置する事に決めたのであつた。変なところで悲観的な思考をしてしまう少女である。

そんな嫌な考えも一緒にお湯で流してしまおうと、そそくさとネイチャは浴室へと入っていく。

「ふい～……やつぱりお風呂は気持ちいいなあ」

きちんと湯浴みをしてから湯船に浸かつたネイチャは目を瞑り顔をほにやりと綻ばせてリラックスしていた。その様は少女にしては些か年寄りくさい。それでもネイチャという少女の幼くも整つた外見によつて、可愛らしいという印象を先に持たせる。「はーあ、これからどうしよ……」

今まで魔法を使うという目標だけを追い求めてきた彼女にとつて、さきの出来事はまさに生きる気力を失くさせるに充分なものであつた。

そんな状態で途方に暮れるのは無理からぬ事であり、開けたままの風呂窓から入り込む侵入者に気づくことはなかつた。

それは一匹の蝙蝠^{こうもり}。

しかしそれは姿形だけでありその色は通常種のそれと違い、全身が白色という異質なものであつた。

その侵入者である蝙蝠はネイチャの頭に着地をしてみせた。

「んう？ 頭になにか

『あの頑固者は面倒な性分だからな。しばらくは大人しくするしかあるまい』

「ツ！ だ、だれっ！！」

頭の中に直接響くような声に警戒心をあらわにする。

すぐさまきよろきよろと周囲を見回すも、特に変わったところはない。それでも何者かの声が語りかけてくる。

『だれと問われれば答えるのが礼儀。よからう、名乗ろうではないか。我的名は——』

謎の声が名乗り出ようとした直後、浴室のドアが勢いよく開かれ何かがネイチャに向けて飛来してきた。それに反応すること叶わず、その何かを顔面にもろに受けてしまう。

「む、ー！ むううーっ！」

うねうねと絡みついてきた何かが彼女の顔をすっぽりと覆い呼吸困難へといたらしめる。

それはまるで布のような質感を持つていた。というかただの布である。

ネイチャは頭の上でモゾモゾと動いている気配を感じ、そういえば頭に何かいたなあ。と今更ながらに思い出す。

「しばらく顔を見せないと思つて清々していた所に、まさか勝手に私の領域に踏み込んでくるなんて。いい度胸ね、蝙蝠もどき」

どうやら布をかましてきたのは、やはりというべきかデイ一ネであった。

一体彼女は誰に話しかけているのか、ボケて虚空に独り言か？ 自分のことを棚に上げいつものように心の内でネイチャが悪態をついている中、頭の上の物体が布を突き破つたことで状況が大きく動く。

「そう邪険にせずとも良いではないか。むしろ、久々の再会ということで歓迎するのがマナーというものだろう」

「こ、コウモリが喋った!?」

パタパタと羽ばたく白い蝙蝠は当たり前のように一人へと話しかけ浴室にその声を轟かせる。当然そんな蝙蝠を見たことのないネイチャは、頭に破けたタオルだけであとは生まれたままの姿を人前で晒している事すら忘れるほどに衝撃を受けた。

「うるさいわよ……。

それと、いつまでそんな姿でいるつもりよ。さつさと変体したらどう？」

「へん……たい？　え？」

「ふむ、たしかに。このままの姿での会話は些か見栄えが悪いな」
なにやら知り合い同士のような会話を目の前で繰り広げるディーネと蝙蝠に、ネイチャの情報処理能力が追いつかず、ついには目を点にして状況を見据え始めるのであつた。

そしてさらにネイチャの度肝を抜く事態を浮遊する蝙蝠が引き起こす。

白い蝙蝠の周囲には光が灯し始め、次第に姿が見えなくなるまでに輝きが増していく。眩しそうに眼を細めながらもネイチャは眼を離すまいと好奇の視線を注ごうと頑張るも、努力虚しく視界を閉ざしてしまう。

「では今一度、自己紹介といこうか」

やがて光が鎮まり程よい静寂が辺りを包む中、耳に届く女性の声。

閉じていた眼を開けたネイチャが目にしたものは、純白であつた。

目の前には見慣れぬ人物が立っていた。しかし“人”というにはあまりにも人間離れした容姿であつたのだ。

純白のドレスに白銀色のマント、そこから覗く白い肌。

二つに括られた美しい白銀の髪がはらはらとなびく様は優美であり、それだけで芸術と言えるほどだ。しかし年功はまだ十代後半にしか見えず、大人と子供の境目といつ

たところ。しかしそれすらも彼女の優麗さを引き立てている。

「私は夜を統べる夜王。至高にして孤高の姫——」

「いいからとつと名乗りなさいよ。王か姫かもはつきりしろ」

そんな至高の姫である彼女をものともしないディーネからはヤジを飛ばされ、目を奪われているネイチャは話すら聞いていない。そんな二人の反応に気にした様子もなく言葉を続ける純白の少女。

「我が名はヴィリゲイラ・リツツエール。お前ら二人を招待しにきたぞ」

「というわけで、そちらにも名乗つてもらおうか」

いつまでも裸を晒しているわけにはいかないと、湯から上がりそそくさと着替え終えたネイチャは、ドレスの下半身部分がお湯に濡れたのを乾かし終えてリビングでくつろいでいたリツツエールに自己紹介を催促される。

ところでこの人誰だろう、とやはり話を聞いていなかつたネイチャは戸惑いながらも名乗ろうと、自身の名を口にしかけるも——。

「ダメよ。そいつに自分から名を明かしては」

ディーネがリツツエールとネイチャの間に割つて入りそれを阻止する。

「え？ でも……」

「私はバカですとでも言つてれば？ 貴女の呼び名なんてそれで充分でしよう」
顔を赤くし頬を膨らませて抗議するネイチャ。それに対しても彼女の頬を指で挟み込んで無力化させるディーネ。

側から見れば仲良く見えない事もない二人であるが、本人達にそんな気は微塵もない
というのだから不思議である。

「はっはははは！ やはり名乗らせないか。良い良い、楽しみは後にするタイプだから
な、我は。むしろ燃えるというものよ。だから名乗り返さなかつた無礼は許そうではな
いか。ははははっ！」

「相変わらず五月蠅いわね……」

何故名乗つたらいけないのかいまいち分からず、首を傾げるネイチャは視線をディー
ネに向け説明を求める。

それを予想していたらしいディーネは向けられた視線を煩わし気に受け止め渋々口
を開く。

「こいつに気を許して自分から名乗つたら最後、波長を支配されて隸属させられる。そ
れで好き勝手扱われる玩具にされるのよ」

「ええ……ほれ、ずるくらいれすか?」

「初対面から警戒していれば大丈夫よ。もつとも、貴女では長く持たなさそうだけれど」
 なんとも初見殺しな能力である。仮にリツツエールから自己紹介されてしまえば、それに名乗り返してしまった者が普通は多いだろう。そうなつてしまえば、名前から通してその者の支配権を獲得し、彼女の言いなりとされてしまうと言うのだから警戒の一つや二つしておいた方がいいだろう。

なんとも物騒な能力にネイチャが戦慄していると、デイーネからお決まりの小言を貰つた事で絶対油断しないと心に決めた。

「さて、我が貴様達の元へ赴いたのは他でもない」

「あれ……なんか話、始まりましたけどいいんですか? 聞かなくて」「そいつは誰もいなくなつても一人で喋り続けるアホだからいいのよ」

そう言つてデイーネは足早に台所へと向かつて行つてしまつた。必然、リツツエールと一人残されたネイチャは聞き役に回るのだつた。完全に純白の姫王の相手を押し付けられる形となつた訳だ。

「我が城へ是非とも招きたく思つてゐるのだ。お前に紹介したい者もいるのでな。ああ、返事はせずとも分かつてゐる。今すぐに行きたいのであろう? だが準備というものもある、しばしの間待て」

「あ、あ……、あのあのあの……！ そつ、そういう話は、ディーネにした方が……よろしいのでは、ないですか？」

ディーネ以外の誰かと言葉を交えるのはこれが初めてであるネイチャにとつて、見るために高貴な見た目をした者、なおかつ止まらないマシンガントーク。ましてやそんな相手に城に招くなどと言われてしまえばテンパるのは当然のことである。結果、これは自分が相手をするには無理があると早々に諦め、ディーネに丸投げするのであった。

「我はお前にも訪れて欲しいのだよ。いや、むしろお前にこそ来て欲しい」

「いや、だからそういう話はディーネと……」

「きつと氣に入るぞ。なにせ我的城だからな。はーはっはっは！」

ダメだこのお姫様、全然人の話を聞かない。

相手にすると疲れるタイプの相手だと分析したネイチャは、さすがお姫様と感心だか呆れだかよく分からぬ想いを抱き、偉い人は皆こうなのかもしれないと読んできた小説と目の前の人物から失礼な先入観を持つてしまう。

「あの、私の見間違えじゃなければ……最初あなたは白い蝙蝠、でしたよね？ そつからなんか、変身的な……あれをしてましたけど」

こういう相手にはとりあえず話題を逸らして氣を紛らわせるのが良いだろうと、実際気になつていた疑問をぶつける。ていうかぶつちやけまともに相手をしたくないとい

うネイチャの素直な感想。

仮にも王様相手にそういう認識はどうなのか……。

「ん？ なんだそんな事も奴から聞かされていないのか。さつきのは変体と言つて、我等の種族のみが扱える技法だ」

「へんたい？ 変態なら誰でもなれるんじや……？」

「何を言うか、そう易々と誰でも出来たら変体の特異性がないであろう。お前だつて出来ないだろう？」

「あつ、はい…………そ、そりや変態じやないし」

「だから変体というのは身体の内から溢れてくる熱いモノで姿形を変える妙技であつて進み、結局――

「そ、そんな事しちゃダメです！ 絶対そんな人と、か……関わりたくないですもん
だな」

「そ、そんな事しちゃダメです！ 絶対そんな人と、か……関わりたくないですもん
だな」

「むむむ、なぜ理解できぬのだ……」

いつの間にか純白の姫と打ち解けてきたネイチャはどこか見当違ひな考えに行きつき的外れな意見を出す。

どう納得させようかとさすがのリツツエールも困り顔で唸り始めてしまった。

「なにバカの最先端を突き進む会話をしているのよ。あんた達」

知つてか知らずかその空気を変える人物、ディー・ネが帰ってきたところで二人の捻れた会話は区切りを迎える。

「おお！ ちょうど良いところに来たな。ディー・ネよ、変体というものがどんなものかその娘に教えてやれ」

「嫌よ、めんどくさい」

「そうです。これ以上、変態について熱く語られても困ります！ こつちが変態になっちゃいますからね！ そうですよね？」 ディー・ネ

ディー・ネが煎れてきたコーヒーの入ったティーカップを二つテーブルに置き終えたのも束の間、再び話が明後日の方向へ進んでいく。

仕方ないと眉根を寄せて口角を下げたディー・ネは辟易とした態度で説明を始める。

「変体とは、身体中に魔力を循環させて姿を変える——ごく一部の者達の有する技法。その中で動物から人へと変化することが出来るのは数えるほど。つまりそこにいるバ力蝙蝠がその一人だということ」

「へんたい……つて、あれ？ んく…………あつ、そういう事だつたんですね。納得納得」

「やつと分かつたようだな。どうだ我の偉大さがどれほどのものか理解したか？」

「はい！ ほんとに蝙蝠から変身してたんですね！ やっぱ変態じやないですか」

「そうだろう、そうだろう」

草に苛立ちを抑えられなくなつたデイーネが口を開く。

「救いようのない馬鹿共め……。

「で？ 結局何しに来たのよ、あんた」

「うむ、そこの娘の様子を見に来たのと、貴様ら二人を我が城へと招待しに来たのだ」

「帰れ」

「詳しく述べを聞こうとしないということは、了承の意と捉えて良いのだな？」

「馬鹿なのね、とつとと死ね」

「あ、あのおー！ お二人はどういつたご関係なんですか！」

話が進展するどころかぐるぐる回転したものとなりかけた所をネイチャガすかさず
「オローラ」

「オローラついでに知的探究心を満たすため一人の間柄を問い合わせた。

「ん？ 此奴とは腐れ縁でな、それなりに長い付き合いになる」

「こいつが一方的に関わつてくるだけ、関係も何もないわよ」

「ふむ……素直じゃないな、ひねくれ者め」

「何か言つたかしら、クサレ蝙蝠」

もう外でやつてくれと本気で願うネイチャの思いとは裏腹に、顔を近づけるまでの睨み合いが発生している中、ネイチャにある考えが閃く。

「あ、あはは。そんなに見つめ合つたりなんかしちゃつたりして……お二人、仲良いんですね——げぶうふううツ!?」

場を和ませようとした一言が自分の首を締める一言を放つてしまう。

そんなネイチャの鳩尾に向けて飛來した真光弾。隙だらけだつたネイチャはそれをもろに受け、少女が出してはいけない声を上げてそのまま意識を刈り取られた。

力なく膝を地につけ前のめりに倒れ伏したネイチャは白目を剥いていた。さらに追い討ちとしてネイチャへ手をかざしたディー・ネは少女に向けて魔法弾を放ち、廊下へと転がらせドアを閉めた。

「おい……ちょっと乱暴すぎではないか?」

「これくらいで丁度いいのよ」

年端もいかない少女に對して、あまりにも容赦ないディー・ネの所業に引き氣味のリツツエールは、密かにネイチャに同情の念を送るのだつた。

「まるで邪魔者扱いだな。可哀想に、あの娘むすめに対してもう少し対応を考えたらどうだ?」

「うるさい。さつさと本題を言いなさい」

「何度も言わせるな。私は貴様とあの娘を我が城へと招待するために——」「あくまでそれは建前でしよう？ わざわざそんな事であんたが訪ねてくるなんてこと無いもの」

はなつからリツツエールの目的は違う事柄だと見抜いているとでもいうのか、デイー
ネはまつたく躊躇ためらいもせず核心をつく物言いをする。

それに対してもリツツエールは先程までの気さくな雰囲気を消し、まるで爬虫類のように鋭い目つきとなる。

「せつかちだな……まあ、そう言つてくるということはこちらの状況を薄々わかっている、ということでよいな？」

「ええ」

ピリピリとした空氣を醸し出す中、洗練された動作で椅子に座る二人はとてもさつきまで言い合いをしていた者達と同一人物とは思えなかつた。

「ではシンプルに言おう——近い内に我等は表舞台へと躍り出る」

緋色と金色の瞳が交差する中、テーブルの上に置かれた二つのティーカップからはゆらゆらと湯気が立ち込めていた。

第六話 色なき世界

「ふうむ、お前の煎れるコーヒーは相変わらず苦いな。しかし、この苦さが癖になる」リツツエールが洗練された所作でカップに口をつけてディーネの煎れたコーヒーの感想を口にする。苦いと言う割には頬をほころばせているので、それなりに味を楽しんでいるようだ。

それに対してこれといった反応を見せないディーネにつれない奴め、と内心呟きながらリツツエールは言葉を続ける。

「そろそろヤツらを抑えるのにも限界が見えてきたのでな。いつその事、そのまま雪崩れ込ませるのもありかと考えていて」

「……そんな事をすればあつという間にバランスが崩れるわよ」

「それもやむなしと言つてはいるのさ。これ以上長引いても状況は悪くなるのは目に見えている。それ故に、早い内に対処しておくのが一番の打開策というわけだ」

「一番の打開策、ね」

訪れる静寂。

互いの様子を観察でもしているのか両者共に目を逸らさず相手の言葉を待ち続け、時だけが流れていく。

タイミングを探るかのように苦いコーヒーを口にするディーネはリツツエールの話す内容を吟味し、慎重さを含んだ声音で沈黙を破る。

「つまりこう言う訳むすめ? 時間がないから私にあんたの下につけ、と」

「いや、貴様はある娘の近くにいれば良い。もちろん、力を借すというのならそれが最善だが。

あと貴様らを我の城に招待したのは、単純に我がそうしたったからに過ぎない」

「なら何の為にここへ訪れたのよ。協力を仰ぐわけでなく、あの人にについて教えるわけでもない」

「そう急くな、近いうちにあいつの事については話すさ。

今回は単に、あの娘に会うのと世間話をする為だ。それ以外の目的などありはしない

い

「あつそ」

こつちはこつちで忙しくなるというのに、よくまあそんな悠長な事を言えるものだとある意味関心すら抱くと共にディーネは、自身の探し求める人物についてリツツエールから聞き出すのは今回も無理であろうと判断した。ならばと情報共有の一環としてあ

る話題について話を進める為、これまでの進捗を報告する。

「それで、あの子——ネイチャの事についてなのだけど。やはり、未だに何も分からぬわ。それどころか疑問が増える一方ね。

ユニヴァレーツ
宇宙花を持つていたり、歌についてもどこで知つたのか曲調まで把握しているようだつたし。

まさか、あんたが吹き込んだ訳じやないわよね？」

「それこそまさかだな。私はそんな回りくどい事は好かん。

「歌を知っているのには最悪納得出来るとして、なぜあの子が宇宙花。それもあれだけ

のものを持つてゐるのかよ」

百歩譲つてネイチャがあの歌の事を何かしらの方法で知つたのを認めるとして、一番不可解なのがあの宇宙花だ。

あれは通常のそれと物が違う。

——存在そのものが異なると言つてもいい。

何故なら宇宙花というのは本来、少量の魔力を含んだだけの見た目が綺麗なだけの花。だというのに、ネイチャの所持していたあれからは底の知れない魔力と言葉にできないナニかが感じられた。

最強の魔女であると自負しているデイーネにそう感じさせ、さらにはあれだけのモノなのに魔力感知にも引っかからなかつたということはつまり、あの花の存在が特異中の特異ということ。

そしてリツツエールがその事について何か知っているだろうと確信にも似た思いをデイーネは抱いていた。

「くく、いづれ分かるさ」

「…………なにか隠しているわね。吐きなさい」

「我がなにを隠すと言うのだ？　あの娘とは今日が初対面だぞ。むしろ貴様の方で隠している事があるんじやないか？」

「あくまでしらを切るというのね。だつたら無理やりにでも答えてもらおうじやない」

椅子から立ち上がり挑戦的な視線を向けてくるデイーネに、リツツエールは慌てる素振りすら見せずにコーヒーを飲み干す。

そして座つたままの状態で彼女もまた視線だけデイーネへ注ぐ。しかしその瞳からは隠しきれないほどの興奮の色が含まれていた。

「ふむ、久々にやるか？　我も我で色々と溜まつていた所だ」

「…………もしかして、こうなるのを目的にしていた。なんてこと無いわよね？」

「細かいことは気にするな。どうせ近い内にやる予定だつただろう？」

それで、ルールはどうするのだ

「今回は質と量での勝負。負けた側は相手の要求に応えること」

その答えに満足気に口元を歪めながら椅子から立ち上がつたりツツエールはディー
ネとの距離を詰め、隣に位置取つた。

「よかろう。では行くとしよう」

そんな彼女に一度だけ目を向けた後、ディー・ネは目を瞑り精神を集中させる。

「あとで後悔しないことね——トレス転移・デュアール」

ディー・ネが練り上げた術式を発動させたことにより、淡い光を纏いながら二人はとあ
る場所へ転移した。

死界——デュアール。

そこはあらゆる生物が生息し得ない劣悪な環境に支配されている広大な平野。

魔力は存在せず、太陽の光もなく、風すら吹く事のない死に満ちた地。

広がるのはごつごつした岩のような物で覆われた灰色の地面と、不気味な光たずさを携えた

黒い空。色のない無機質な世界。

必然的にここを訪れる者は皆無。また訪れたとしても生存する事は不可能であるこ

とから死の平地とも呼ばれる。

そしてその灰色と黒に覆われた地で、二つの人影が対峙していた。

「おやおや？ 黒色ばかりでディーネの姿が見えんな。これは我の不戦勝で良いのどうか？」

「私には不自然に色の浮いた物体しか見えないのだけど、節穴の目をした馬鹿蝙蝠は怖くて逃げ出したのかしら」

まずは軽いジャブで相手を煽る白色リツツェールと黒色ディーネ。

こんな場所にきてまで二人のする事はさつきと変わらないようだ。

そんな彼女達であるが、お互に笑顔を向け合っている。もちろん、その目はまつたく笑つておらず、まるで獲物を狙う肉食獣を彷彿とさせるものだつた。

「冗談はここまでにしておくか。

どれ、以前に比べてどれほど力をつけたか確かめてやろう。我は寛大なのでな、先手は貴様に譲ろうではないか」

「前回勝つたのがそんなに嬉しかつたのかしら？

でも残念ね、あんたは二度と私には勝てないわ。よく見てなさい、一発で全部終わりにするから」

ディーネはそう宣言し、はるか地平を見据える。

その様相は何かが現れるのを待つかのようであり、彼女の背後ではリツツエールが腕組みをし同じ方向へと目を向けていた。

やがて変化が起きる。

地平の彼方よりナニか巨大な影のようなものが迫ってきたのだ。次第にそれは無数の人影のようなものだと遠目からうかがえた。

にわかに信じられない事である。彼女達二人はその在り方からして除外されるとして、間違いなくこの地にて生物が現存しているなど有り得ないこと。

つまり——あの影は生き物にあらず。

「幻魔。まつたくいつ見ても、薄気味悪い事この上ないな。あれだけの数でありますながら、あいつらの動きは意思でも宿しているのではと思わせるものだ。こちらに正確に狙いを定めて一糸乱れぬ行軍をしている」

“幻魔”。

それはこの一帯にのみ出没する未知の存在。

姿形は人型を保つていてもそこに凹凸は存在せず色も宿つておらず、また個々に意思というのも存在せず、愚直なまでにこの地に足を踏み入れたものを排除する。まるで無機質な影だった。

そして彼女達がここを訪れる度に、必ず彼らは姿を現し進軍を行なつてくるのだ。ま

るでこの先には行かせないとばかりに。

しかもそれぞれの個体の持つ力もまた強大であり、魔に通じている者ですら一対一に持ち込まなければ相手取るには厳しいほど。

そんな絶望の波が押し寄せているにも関わらず、二人は自然体そのもの。

むしろ怖れるどころか取るに足らない相手と言わんばかりにディーネが口を開く。「なら私達はそれを良いように利用するだけ。いつものようにあちらから向かつてくるのなら好都合。日頃の鬱憤を晴らすに最適じゃない」

「くく、違いない」

そう、彼女達にとつてこれは唯のお遊び。そしてちょっとした責務に過ぎず、ストレス発散の手段の一つでしかない。

故にこれから始まるのは強者による一方的な蹂躪。どちらがより幻魔を消し去れるか、その数を競おうというのだ。

目線の先に数えるのも馬鹿らしくなる数の影が地平の向こうから大地を揺らしながら、こちらとの距離を縮めてくるのを認めたリツツェールは強く地面を蹴り、その身を大空へと運ぶ。

「目測でおおよそ二万弱、といった所だな。

それなりの数だが本当に一発で済ませるつもりか?」

ほんの数秒足らずの滞空時間の中で、あれだけの影を数え終えてしまつたりツツエールは遙か上空からの着地をし、さすがに一度で済ませるには厳しい数なのではと遠回しに問う。

「愚問ね、あの時とは違うのよ。魔法の新たな道を見出した今、どうつてことないわ」

そう言い切つたディーネの周囲から暴力的な魔力が吹き出し、赤黒いオーラを彼女に纏わせ周囲の空間を歪める。しかしそれだけに留まらず大地は震え、歪な形をした岩や石が次々と浮遊し始め、魔力の渦が風を引き起こして彼女達の髪を揺らめかせる。

それはこの世の終焉を思わせる光景であつた。

色のない世界に魔力の嵐を生み出し、地を搖るがす程の力。

驚く事に、これですらディーネは全力の半分も出していない。

ただ一人、その事を理解する事のできるリツツエールはなるほど確かに、これは以前にも増して凄まじいと少なくない衝撃を受け、周囲を満たす圧倒的な魔力に見開いていた目をゆつくり細める。だが次には口元を大きく釣り上げて獰猛な笑みを見せる。

——やはり自分たちの行く道は間違つていなかつたと。

「聖天を司りし魔の始祖

燃え尽きぬ慟哭を解き放て

焦がれ、肥し、壊せ

——知らしめよ」

ここでリツツエールの中で一つの疑問が生まれた。

はて、なぜ今更安定性を高めるだけの詠唱を行つてゐるのか？ この魔女はそんな次元をとうに超えているというのに。

わざわざ詠唱を加えなくとも常に最大限に魔法の力を引き出せるはず。そしてその疑問はさらなる疑問の呼び水となつた。

——明らかに周囲を満たす魔力量が増えている。

ここにきてまだ魔力の上昇が認められたのだ。

大前提として詠唱というのは練り上げた魔力を形にして作る際に組み込む事でより安定した魔法を発動する事を可能とする、いわば補助の役割を持つもの。

つまり詠唱を唱えていたる時点で魔力の上限は決まつていて筈。当然ディーネもその例に漏れずそうだった。

だといふのにどうだ、目の前で起きていたる常識を踏み越えたこの現象は。

以前のディーネではどうに限界を迎えていただろう領域を突破してもなお、魔力の上昇は止まらない。そしてリツツエールに冷や汗が滲んだ頃、ついに詠唱が完成した。

「『極天の黒き明星』」

詠唱を唱え終えた事で魔力の嵐がディーネを中心にして渦巻き魔法を形成していく。

空に向けられた彼女の片手に収束していく膨大な魔力。初めは小さな手のひらサイズの球体でしかなかったそれは、瞬く間に膨張していき遂には空に届かんばかりの巨大な魔力玉となつた。それは1秒にも満たぬ刹那の間に起きた事である。

「ほう、黒い星……か」

感心したように漏らしたリツツエールは成る程と納得する。これはまさしく黒き星。視界を埋め尽くす黒い魔力玉の全貌を確認するのはここからでは不可能。しかしこれを生み出したディーネとの対比を見れば、そのサイズ感が狂わされる様を星と人に言いい表せるだろう。

ゆつくりとディーネが腕を振り下ろす。

その巨大さ故に黒の巨星はゆつくりと進行しているかに見えるが、その実とてつもないスピードを持つてみると影の軍団との距離を埋める。

——そして着弾。

地鳴りの音が消え、呼吸の音も消え。次には視界を真っ白に染める極光が襲い、全てのものを消さかる光が幻魔の群れを包んだ。

死界が眩い光に覆われてからしばらくし、光が収まつた後には来た時とまるで変わらない黒く死に満ちた世界が広がつているのみだつた。

地を埋め尽くす程の幻魔達は灰すら残さぬ光にさらされ、まるで初めから何も存在し

ていなかつたかのようない完全なる消失を受けたのだ。

「影すら消し尽くす光、か。凄まじいな、全滅ではないか。手も足も出ないとはこの事か？」

パチパチパチ、と小気味よい音を拍手で奏でながらリツツエールは、高揚した声で前に立つディーネへと称賛を贈る。

「そうね。奴らなんて力を使わせなければただの動く的でしかない。そんなもの脅威にもならない塵芥よ」

ディーネが乱れた髪を手ぐしで整えつつ、つまらなさうに吐き捨てた。

しかしあれだけの大魔法を使った後にも関わらず、疲労の気配も見られないのはどう考へても異常。一体、彼女になにがあつたのかと勝負そつちのけで好奇心を膨らますリツツエールに、ディーネが声をかける。

「それで？　どうするのよ。

あまりに開いてしまつた力の差に怖氣付いたのなら素直に負けを認めたら？　態度次第では認めてやらない事もないわ」

ディーネからの己の勝利が絶対という自信をありありと含んだ台詞を前に、本来の目的を思い出したリツツエールは対抗心を刺激され堂々とした佇まいを崩さずに余裕を見せる。

「ぬかせ。純粹な火力では差をつけられたようだが、我的真価は別にある——波長の支配だ」

波長を支配する。この能力こそが彼女の自信の現れ——その気になればどんなものでも自身の意のままに操れるのだから。

再び辺りに地鳴りが轟き、まるで次の舞台のために用意された役者の如く新たな幻魔おもちゃが現れる。しかしその形状とサイズは先ほどの人影とはまつたく別次元のものだつた。

「へえ、これは……珍しいモノが出てきたわね」

「くくっ、丁度良い。久々に楽しめそうだ」

先ほどディーネの放つた魔力玉と比較しても謙遜ない巨大な影。

しなやかさをもつた長い身体を何重にも巻いてもなお、見上げなければ全身を把握する事が厳しい巨軀。その天辺——巨大な影の顔あたりから細く長い、まるで舌のようなものを使つて威嚇するその姿は蛇を連想させた。

「生意氣にもこちらを威嚇してくるとは。奴に声帯があつたなら、さぞ聞くに耐えない雑音を撒き散らしていたのであろうな。もつとも、声帯があつたらあつたで我的力で封じていたがな」

「御託はいいからさつさと片付けに行けば?」
「せつかちな奴だ……どれ少し遊んでくるか」

首を一度回して無駄な力を抜いた後、リツツェールが両足に力を込め地面を踏み締めた。それだけで足元から大きな轟が広がる。そして——力の解放。

流星を彷彿とさせる鋭い疾さを持つて大蛇に向かっていく。
後に残つたのは大小の岩石が砂埃と共に勢いよく巻き上がり、それをもろに被つた黒の魔女。すっかり汚れてしまつた衣服や髪に視線を彷徨わせた後、煩わしげに大きく舌打ち。

そして小さく後で潰す、ヒドスの効いた声で呴き見送るデイーねだつた。

第七話 大蛇

こんなにも気分が高揚したのは本当に久々だと、高ぶる殺意を抑えながらも狂氣を孕んだ瞳を向け獲物の背後を獲る白き王。

最近は歯応えのない幻魔ばかりでうんざりしていた所。

ましてや自身の秘蔵つ子と仕合うにもまだ時期が早いことから、色々と溜め込んでいた彼女にとつてまさにこの大蛇は格好の遊び相手だつた。

「懐かしいな、随分前には世話になつたものだ。なあ？」

——レビイアタン。

かつての自分は今ほど強くなく、初めてこの大蛇と初めて対峙した時は死すら覚悟したほど。

事実、あの時は勝つのにやつとで死ぬ間際まで追い詰められたのは苦い思い出だと、刹那の間に記憶を振り返つたりツツエールは再び地を蹴る。

「貴様ら意思なき者は成長も退行もしない。ゆえに不变——哀しき存在だ」
リツツエールの姿が消え、次の瞬間には蛇の胴が弾ける。

レ
“ヴィ
深淵の怪蛇” タン よ

それは巨大な蛇にとつてはごく一部分に過ぎず、たいした事のない傷。一回、二回この攻撃を受けたところで痛くも痒くもない。

ではそれが何百何千と続いたら……？

「私はここまで上り詰めたぞ？ もうお前とでは殺し合いにすら発展しえない程にな。

まつたくもつて時の流れとは酷く残酷だな」

レビュイアタンに向けどこか憂いのこもつた聲音で語りかける。その間にも不可視の攻撃をもつてして絶え間なくレビュイアタンの体を抉り、確実にその体積を減少させていく。

白き王からの見えざる攻撃から逃れるように、その巨体を大きくうねらせ規格外の質量を使つてリツツエールを打ち落とそうと慣れ乱れて、死界に轟音を響かせる。

一見有利なのはリツツエールに見えるが、当然これで終わるほど相手もやわでは無いとリツツエール自身、一番よくわかっている。

一瞬の隙でも見せればこいつは仕掛けてくる。ならばそれを逆手に取つてより優位に立ち、己の力を知らしめよう。

地上近くで疾走しての攻め方から一転、高度を上げ舞台を遙か上空に移すリツツエール。

その先で待ち受けていたのは、巨大な蛇の頭をした影——それが目の前まで迫つてき

ていた。

その巨体から信じられないスピードでリツツェールに突進を仕掛けってきたのだ。

上から迫る圧倒的質量をなんの苦もなく受け流し、いつの間にか傷のなくなつたレイリアタンの体表を、撫でるように体ごと滑らせそのままの勢いで再度宙に舞い上がり、そして――

「そら置き土産だ――　“散^{ディスペル}れ”」

その一言で彼女の移動してきた箇所が内側から膨らみ弾け飛ぶ。それによつて影の体積が大きく削られた。

しかしそれだけの攻撃を受けながらレビアタンは倒れない――否。それどころか瞬く間に消失した部分から黒い霧が吹き出し、再び大蛇の巨躯を元に戻したのだ。

それをしてリツツェールは驚くでも悔しがるでもなく、淡々とした瞳で影の蛇を見定めているだけだった。

何故なら彼女は知つていたのだ。以前に嫌というほどこの再生力に苦しめられたのだから。

そして今はこの驚異的な再生力をも上回る奥の手を有していた。

だが、まだ早い。もつと吐き出させてから仕留める。

空中に投げ出されたりツツェールは重力に引き寄せられるまま地面に落下していく。

その最中での死角からの一撃。

それをまともに受けたリツツェールの身体は勢いよく大地に叩きつけられ、鼠色の岩石と砂が舞い上がり、巨大な灰色の柱となつて死界を彩る。

攻撃の正体はレヴィアタンの尻尾だった。

そのしなやかさを最大限に發揮し、音速を超えた尻尾での薙ぎ払いを持つてしてリツツェールの背後からの強襲を可能にしたのだ。

次には今度はこちらの番だと言わんばかりに影の蛇の猛攻が始まる。

長く巨大な体をまさしく全身を使って多方面から叩きつけ、地に落ちた白き王へ致死の乱撃を浴びせ続ける。

その一撃一撃が大地を揺るがし地形を変える程の理不尽な威力と質量の籠もつた攻撃。いくらリツツェールが常軌を逸した強さを持つとしても、ダメージを負うのは免れない。当然反撃の余地もないだろう。

紛れも無いリツツェールの危機的状況だというのに、ディーネは助けに入ることすらせずにただその状況を見つめるのみ——言外に動く必要がないと言わんばかりに。その中で一筋の光が陥没した地面から放たれる。ちょうどリツツェールが落下したあたりからだ。

白き光線がレビアタンの胸に大穴を開けその動きを止める。

「ふむ……まだ足りぬ、か。だがもう少しではあるな」

陥没しきつた地面の中心——もうもうと立ち込む煙が晴れた先には、指を一本突き出した状態で余裕の表情を見せるリツツエールがそこにいた。

あれだけの猛撃を受けたにも関わらず、白き姫は傷一つ負っていない。が、さすがに衣類や髪やは汚れてしまつており、白から灰色へと主色がカラーチェンジしてしまつていた。

それにさして気にした様子もないリツツエールは、仁王立ちに姿勢を変えて挑発的な笑みを浮かべて相手の様子をうかがう。

巨大な蛇の影もまたそんな彼女の動きを見定めかの如く、天に届かんばかりの巨躯を動かさずじつとしている。

その間、ほんの数秒であつたが當人たちにしてみれば何分にも及ぶ長い睨み合いだつただろう。

最初に動いたのはレビアタンだ。

伸ばしていた体を使い、巨大な円を描く形でその巨体をぐるぐると回転させ始めたのだ。

それだけで大地は大きく震え、腹に響く轟音を響かせ大量の砂塵を巻き上がる。

そんなのは序の口と言わんばかりにどんどんその速さを増していき、レビアタンの

一帯に強烈な風の渦を生み出す。

それは台風そのもの。

近づく事すら不可能なまでの強風を纏い、生きる災害となつてリツツエールへ襲い掛かる。

そんな悪夢としか思えない光景を呆れた目で見つめるのは黒き魔女、ディーネ。

「リツツエールの奴、何やつてんのよ。じゃれあうのも大概にしなさいってのよ」

そう何度も服や髪を汚してなるものかと、予め空間遮断の魔法を周囲に張り巡らせていたディーネだが、こんな迷惑を振りまく幻魔相手にいつまで時間をかけるのだと、リツツエールの心配をするどころか愚痴を零してさえいる。

そんなディーネの不満の声が届いたのか、遠く離れた場所でリツツエールが笑つた——かのようにディーネには見えた。

そして災害そのものとなつた大蛇に向けリツツエールはただ一言、宣言した。

「死メメントモリを忘れるな」

たつたそれだけで吹き荒れていた風はみるみる内に力を失いついには無風となる。

それはつまり、レビュアタンが動きを止めたという事でありその意味する所は——。

「今一度の別れだ。次に相見える時が最後になるであろう」
あいまい

レビュイアタンに死がもたらされたという事。

尾の方から影が崩れていくといふのに、さつきまで行つて再生をする事なく天に届く巨躯を持った影の蛇は何の抵抗もせず、己の消えゆく時を待つていた。
そして蜃氣楼のようにゆらゆらと実態を無くし始めても、レビュイアタンは完全に消える最後の時までリツツエールに視線を注ぐよう、表情も何もない貌をじつと向けていた。

「どうだ？ 見事あの化け蛇を打ちのめしてやつたぞ。流石は我だ、完全勝利だつた——
——ぐづ」ツ

「さつきのお返しよ」

ドヤ顔で自慢しに來たりツツエールの鼻つ柱にグーパンチをお見舞いし、有言実行を果たしたディーネ。砂やらなんやらを引っ掛けられたのが余程気に食わなかつたらしい。

容赦ない顔面パンチを喰らい、たまらず手で鼻を押さえるリツツエールだが無情にも鮮血が白い肌を汚し、手の隙間から血の零が滴り落ちている。

「いふらなんれも鼻をつぶすなんへ、やりふぎではないは？」

「あら？ なんて言つてゐるか聞き取れないわね。いつから人の状態で蝙蝠語を話せるようになつたのかしら」

「おぼえへろ、ぜつらいなかふ」

リツツエールの鼻を潰してもなお、デイーネはご立腹だつた。これは下手にちよつかい出すと危険だと、改めて目の前にいる魔女との距離の測り方に困らされるリツツエールであつた。

それから数分後、鼻の怪我が自然回復したリツツエールは話を切り出す。

「なんにせよ、これで勝敗は決したな」

「あら、自分から負けを認めるの？ 殊勝な心がけだこと。珍しい事もあるものね」

「何を勘違いしている。負けは貴様だぞデイーネ。ついさつきの事も忘れたのか？」

「我があれだけ見事で華麗なる勝利を納めたであろう？」

不穏な空気が場を占め、死界の雰囲気がより一層暗いものへと悪化していく。双方の言い分はどちらも一直線で、決して交わる事ない主張をしている様はどうみたつて子供同士の喧嘩であつた。

そんな灰黒ペアにとうとう幻魔すらも氣を遣つたのか、両者が睨み合う中またまた影の軍団が現れた——小規模であることから氣を引こうという風にも見えてしまうのは、果たして氣のせいか。

しかし悲しい哉、幻魔の集団に視線すら向けずにディー・ネが手をかざし詠唱なしでの魔力弾を放ち殲滅。

「あんたにこんな芸当が出来て？ 相手に近づいて触れなければ何もできないあんたに」

「やれやれ、これだから頭の固い奴は。

適度に体を動かしてこそ、勝利の美酒に酔えると言うものだろう。そんな急げているようでは、だらしのない身体になるぞ？ いや、もうなつてているから黒色の服を着込んでいるのか……？ なるほどなるほど」

「……さて、今度はどこを潰されたい？ その貧相な胸をさらりと粗末なものに変えてあげようかしら」

どこまで行つても相反する相手だと、この時だけは二人して同じ事を考えていた。
しかし実際問題、二人に優劣をつけるとしたら判断に困る所ではある。

ディー・ネは火力と安定性を最高レベルで兼ね備えており、魔法を極めていながらさらには高みを目指す生糀の魔女。さらには魔力量も別次元であることから間違いない現世界で最強と呼べるだろう。

対してリツツェールは、単純な身体能力で言えばディー・ネを上回り、火力とスピードが桁外れに高くさらには波長の支配という馬鹿げた能力まで併せ持っている。

この能力は触れた対象の波長を掌握しそれを操ることができる。もちろん自身にもその効力は適用される。

例えば自分の波長を引き延ばし体感速度を極限まで高める事が可能である。他には名前を本人から聞き出せたなら、完全にその者を支配下におけるという巫山戯た特性まである。そうなれば洗脳やテレパシー、後は内側から爆発させたり存在そのものを消し去る事も可能。もつとも“生きたもの”に対しても、消すと言った行為は行えない。それでも強力無比に過ぎるだろう。

「そもそも今回の勝利基準は質と量。確かに貴様の魔法は凄まじかつた。たつた一撃で万を超える軍勢を消したのだからな。」

だが所詮、烏合の衆を屠つたとして自慢になるか?」

ルールに則るなら、質と量によつて勝敗が決まる。では何をもつてしてどちらが優れていると決めるのかが重要だ。

そこでリツツェールは己の勝利は揺るがないと自分の成果を述べる。

「対して私はレビュアタンを完封したのだぞ。どう考へても我的勝利は揺るがん」

「なら順番が違つていたらどうかしら。あんたの場合、物量で迫られたら厄介なんじやなくて?」

「それも運の内。つまり、貴様の次にレビュアタンが現れたのも我が勝利の女神に愛さ

れているということだ。はーはっはっはっのは!!」

たしかに勝負は時の運とも言う——悔しいがこれには反論する事が出来ない。だからと言つて素直に負けを認めるのも癪である。なにより前回に続いて負けをこれ以上増やしたくない。

前回の勝利条件はどちらがより多くの余力を残して立つていられるかだつたが、あの時は最初に飛ばしすぎてスタミナ切れを起こすという痛恨のミスをしてしまつた事で負けに繋がつた。

だからディーネは一つの賭けにでた。

——リツツエールの逆鱗に触れるという形を取つて。

「ふん、虚勢を張る姿はいつそ滑稽ね」

「……なんだと?」

「あんたに何万もの幻魔を一度に葬れるかしら。いえ、無理でしようね——その能力では」

自身の能力に絶対の自信を持つリツツエールにとつて、その一言は禁句であった。

楽しげだつた雰囲気から一転、恐ろしいまでの殺氣と憎悪を込めた黄金の双眼が
ディーネを見つめる。

「私なら深淵の怪蛇や強き欲念獸だろうと、あんたと同じように、いえそれよりも早く仕

レヴィアタン

ダモン

留められるわ」

「ほう……それはそれは、さぞ見応えのあるショーになりそうだな」

言葉とは裏腹にその聲音は冷たく、思わず跪き頭を垂れる事を強要させる圧力が含まれていた。

リツツエールは今にも怒りが爆発してしまいそうになるのを理性で押さえつけ、どうにか話を纏めようと言葉を続ける。

「しかしこれ以上は幻魔共が出てくる様子もない。これでは試しようもないだろう。

そこで、だ。素直に負けを認められぬ貴様の代わりにあの娘むすめに判断を委ねるというのはどうだ」

「ネイチャに……？」

どうにか思惑通りに事が運んだ事に内心ほくそ笑むデイ一ネだつたが、突然出てきたネイチャの名前に疑問が生まれる。

「そうだ。それなら双方納得出来るのではないか？」

「言つたわね、ネイチャなら私に味方するに決まつてるじゃない」

「くくっ、随分と信頼しているのだな。しかしあの娘が貴様に信を置いているとは思えん。

いやむしろ、嫌悪していると考えるのが普通か。あれだけの仕打ちを行なつているの

だからな」

今度はリツツエールがディーネの不興を買う番だつた。

あれほど興味を示していた魔法の禁止をネイチャに言い渡したばかりで、実はもしかしたら本当にネイチャから嫌われているのではと心のどこかで考えては、それがどうしたと思考の切り捨てを繰り返していたディーネにとつてリツツエールの指摘は無視できなものだつた。

そんなディーネが悔しげに表情を歪ませたのも一瞬。すぐに何か思いついたように口元を愉快そうに歪めた。

「あんたなんかに私達の事についてどうこう言われる筋合いはない。第一、それを言うならあんたの所の跳ねつ返りにこそ当てはまるのではなくて？」

「我はヴィーニヤに無償の愛を注いでいるのだぞ？ その我に対し悪感情を抱くなど断じて有り得ん」

「愛……？ あれのどこが愛よ。ほんと、あんたの腐った感性は一級品ね」

「一方貴様はどうだ。無常にもあの娘に魔力を叩き込み、知的探究心を抑制している。どちらが嫌われるかなど言うまでもないだろう」

ディーネからの指摘には耳も傾けず自身の主張を続けるリツツエールに、よくあることであるがやはり腹が立つとディーネは片目をピクピクさせる事で気を紛らわす。

毎度のように互いの主張が平行線で行き続けるのはいかがなものかといい加減、嫌気の差してきたディーネは話を打ち切る事にした。

「……はあ。これ以上の言い争いは止しましょう。無駄にこんな所で体力を浪費する必要もないのだし」

この場所がなぜ死界と呼ばれているのか。それは単純にこの地に魔力が存在しない——という事ではなく、ただそこにいるだけで魔力が体から消えていつてしまう事から、ここが死界と呼ばれる所以となつていて。

もし常人がこの場に来訪したとして、生きていられる時間は精々三分といったところ。それを過ぎれば魔力が枯渇し死に至る。とても長居して良い場所ではない。

それは彼女達にも言える事であり、この世に生きる者にとつて魔力とは生命力そのもの。その摂理はこの二人にも適応されると言うことだ。

「む、それもそうだな。なにより、ここに長居しすぎてはわざわざ来た意味もなくなつてしまふ。

そうと決まれば戻るとするか」

ようやく話も纏まり帰還する事が決まり、リツツェールは不機嫌な雰囲気を飛散させディーネの隣に陣取る。

どこまでもマイペースな奴。と口に出したところで先程の焼き回しになるのは目に

見えていると、諦めに似た想いをため息と共に吐き出した。デイー¹ネは転移魔法を使い、リツツエールと共に自宅へと戻るのだった。